

田舎の姑と街の嫁

岡本ジュンイチ・作



目次

登場人物	1
本文	2

登場人物

中森なつ . . . 28歳。専業主婦の起業コンサルタント。

中森優子 . . . 62歳。なつの姑。

本文

舞台は小さな田舎の居間。

舞台中央には座卓が置いてあり、その上には、額縁に入った男性の写真が置かれている。

中森なつは自分のパソコンを持って登場。

なつ、パソコンを起動させ、カタカタとキーボードを打ち始める。

なつ「はあい、皆さ～ん。こんにちは～。皆さん、全員いますか？ あれ、また前崎さんが見えてない？ ああ、そうで、す、か～。じゃあ、あと1分したら待ちましようか。……あ、見えた。前崎さんこんにちは～。お元気でしたか？ うふふふつ。ああ、そう～。そう。ヘエ～、いいじゃないですか～。この調子でどンドン、加速させていってくださいね。それじゃあ、そろそろ始めましょうか。よろしくお願いまーす」

そこに、中森優子が登場。

けれど、なつは優子の存在に気づく気配がない。

優子「ただいま」

なつ「（無視して）それじゃあ、皆さんのビジネスの状況を確認していきましょう。それでは高橋さん、どうぞ」

優子「ただいま」

なつ「……………」

なつ、優子の方をゆっくりと見つめる。

間。

なつ、優子に軽く会釈をし、再びパソコンの方へ向き直す。

なつ「それでは高橋さん、どうぞ」

優子「何やってんのよ」

なつ「（無視して）ああ、そうなんです～ね。これは素晴らしいじゃないですか～」

優子「なにやってるのよ」

なつ「あっ、ちょ、ちょっと……！」

優子、なつのパソコンをつかみ上げて、その画面を見つめる。

優子「ひやあ〜、何よ、これは。人の顔がいっぱい！」
なつ「ちょっとお義母さんっ。いまズームでコンサルをしているところなんです。返してください」
優子「ズーム？ コンサル？ 何よ、それ。うわっ、顔がたくさん！」
なつ「おかあさん！！！」

夏の激怒に、優子はそそくさと逃げ去ってしまう。
だが、しばらくすると優子はひょっこりと顔を出し、おそるおそる家の中へ入っていった。
そんな様子をじっと見つめているなつ。

優子「……悪かった。悪かったよ〜。ただ、あたしは寂しかっただけなんだよ〜」
なつ「だからって、パソコンを取り上げることないじゃないですか」
優子「仕方ないじゃないか〜。だって無視するんだもん」
なつ「無視するって、私がですか？」
優子「(頷く)」
なつ「してないですよ」
優子「いいや、したね」
なつ「してません」
優子「した」
なつ「してません」
優子「したよ」
なつ「してないものはしてません」
優子「ひとが挨拶している時に、パソコンなんか操作しているのが悪いんだよ〜」
なつ「ちょっと待ってください、コンサル生さんたちに事情を話すから」
優子「いやっ、だから何なのよ、その「コンサル」っていうのは」

なつ、優子の質問を無視して、再びパソコンを開き出す。

なつ「ああっ、すみませんね〜。皆さん、せっかく集まっていたのに。……えっ？
いやいや、ホントごめんなさい」
優子「何をやってるの、なつさん」
なつ「(無視して) ちょっと待ってくださいね。(優子に向かって) あとで説明します」
優子「いま説明なさいよ」
なつ「ちょっと待ってください。お願いですから」
優子「……………」

なつ、舞台の奥へ退場。
間。

優子「なつさん？ なつさん。な〜つ〜さ〜あ〜ん！」

しばらくすると、なつは居間の中に入ってくる。

なつ「お願いだから静かにしてて下さい、お義母さん」

優子「どういうことか、説明してよ〜」

なつ「……説明してませんでしたか？」

優子「してないわよ」

なつ「見ての通り、仕事をしてたんです」

優子「仕事って。あのパソコンで、仕事してたの？」

なつ「そうです」

優子「具体的には」

なつ「コンサルです」

優子「どこの猿だって？」

なつ「コンサルです」

優子「何よ、それは」

なつ「わかりませんか？」

優子「わからないから聞いているじゃな〜い。全く、それだから最近の若い娘(こ)は」

なつ「お義母さん」

優子「……で。その、「こんさる」って、何なのよ」

なつ「コンサルっていうのは、いわゆる事業構築のための相談事業のことですよ」

優子「人生相談ってこと？」

なつ「違います」

優子「違うの!？」

なつ「ひとの話をちゃんと聞いてくださいよ〜」

優子「ちゃんと聞いているんだけど、理解できないのよ〜」

なつ、じっと優子を見つめている。

優子、自分の頭を撫でながら、なぜか舌をべろっと出す。

間。

なつ「……要するに、ほかの人の仕事作りを、手伝う仕事をしてたんです」

優子「ああ〜」

なつ「ようやく、わかっていただけましたか」

優子「ぜ〜んぜん」

なつ、ずっこけてしまう。

優子「大丈夫!? なつさん!? なつさん!!」

優子、夏をはたこうとする。
そのは炊こうとする手を素早く止めるなつ。

優子「あ、生きてた」
なつ「なに言ってんですか」
優子「えへへへへへ」
なつ「笑い事じゃありません」
優子「……………」

少しの間。

なつ「……もう一度、説明しましょうか。つまり私は、在宅で仕事をしてたんです。」
優子「仕事？ 家の中で？」
なつ「そうです」
優子「あんた、いつの間にそんなことしてたのよ」
なつ「その事はごめんなさい」
優子「パートはどうしたのよ」
なつ「それもちゃんとやっています」
優子「そうなの？」
なつ「はい」
優子「パートの合間に、また仕事を入れてたの？」
なつ「はい、そういうことです」
優子「じゃあ、あたしはアンタの仕事を……邪魔しちゃった、って事なの？」
なつ「……まあ。そういうことになりますね」
優子「あらマッ！ それは悪いことしちゃったわね～」
なつ「いいえ」
優子「でも、密かに仕事してた、なつさんもなつさんよ」
なつ「わかっています」
優子「もう～、しっかりしなさいっ。プンプンッ！」
なつ「は、はぁ……………」

優子、プンプンに怒っている。
間。

優子「どんな仕事よ」
なつ「えっ？」
優子「なつさんがしてる仕事は、どんな仕事なのよ」
なつ「……それはですね」
優子「ええ」
なつ「女性が行なう事業構築の相談やサポートの事業です」

優子「事業構築？」
なつ「そうです」
優子「何か、会社をおこす、お手伝いをしてるってこと？」
なつ「会社というよりは、ビジネスですね」
優子「具体的には」
なつ「たとえば心理カウンセラーの開業をサポートしたり、オンラインでの教室運営をバックでサポートしたり、時にはコーチングやコンサルもやってて」
優子「なつさんなつさん」
なつ「はい？」
優子「お願いだから、あたしにその横文字を連発するの、やめてくれない？」
なつ「横文字とは」
優子「その「サポート」とか「オンライン」とか、「バック」とか「ポージング」のような、意味不明な言葉のことよ」
なつ「ポージング」
優子「そう言ってなかった？」
なつ「私が言ったのは「コーチング」であって、「ポージング」じゃありません」
優子「どっちも同じよ」
なつ「どこが！」
優子「ここは日本よ？ 外国語なんか使わないでちょうだい」
なつ「そう言われましても……」
優子「聞いててイライラするのよ〜。まったく、それだから最近の若い子は……」
なつ「わかりました、じゃあ、使わないようにします」
優子「で、アンタの仕事の内容って、要するに仕事の支援をしてるってこと？」
なつ「いや、仕事というよりは事業構築の支援ですね」
優子「なにそれ」
なつ「自分の仕事を作るための、ビジネスモデルや」
優子「ほらまた！」
なつ「あっ……」
優子「どこのモデルさんがいるんですって？ ビジネスモデルって、どこの雑誌モデルよ！」
なつ「ビジネスモデルはモデルさんとは違います」
優子「えっ、ちがうの？」
なつ「はい」
優子「ファッションモデルとどう違うのよ！」
なつ「お義母さん……」
優子「もっとあたしにわかりやすく伝えてちょうだい」
なつ「……………」
優子「どんな仕事をしてるの」
なつ「まあ、カンタンに言えば、相談に乗ってたんですよ」
優子「なるほど、相談ね。人生相談とか」

なつ「違います」
優子「違うの？」
なつ「はい」
優子「だったら何の相談なのよ」
なつ「ですから、事業構築の相談です」
優子「だから何よそれ」
なつ「だから、ビジネ……」

優子、急に険しい表情になる。

なつ「……えーっと、要するに、自分の仕事がうまくいくように、コンサ……えーっと、相談に乗ってたんですよー」
優子「ふ〜ん。そんな相談に乗るだけで、儲かるの？」
なつ「はい」
優子「お客さんはどうやって集めるの」
なつ「SNSです」
優子「エスエヌエス？」
なつ「はい」
優子「何よ、それ」
なつ「えっ？ SNSも知らないんですか」
優子「ダテに62年生きてないわよ」
なつ「でもSNSは知らないんですよね」
優子「知るわけないじゃない」
なつ「威張るな！」

優子、不意になつに襲い掛かろうとする。
急ぎ足で後退りするなつ。

なつ「……えーっと、なんて言えばいいのか〜」
優子「わかりやすく説明してちょうだい」
なつ「……SNSっていうのは、つまりネットの……仮想空間の中でおくるフリーペーパー……無料冊子のようなものなんです」
優子「なるほどね。つまり、なつさんの仕事は、その仮想空間で無料冊子を配って宣伝をしてるってことなのね？」
なつ「いや、それは……」
優子「違うの？」
なつ「はい、合ってます！」
優子「ならいいじゃな〜い」
なつ「合ってますよ！ 合ってるけど正確には違うんです」
優子「どういう意味よ」

なつ「もう、いや！（急に笑い出す）」

優子「どうしちゃったの、なつさん」

なつ「何でもありません！」

優子「困った時は、いつでもあたしに話してちょうだい。いつでも相談に乗るから」

なつ「（狂気じみた笑い声を放つ）」

優子「なつさん。ほんとに大丈夫？」

なつ「何でもありません。何でもないんです」

優子「でも……」

なつ「ちょっと散歩してきます！」

なつ、退場。

間。

優子「（傍白）もう～、ヤンなっちゃうわ～。何もかもやんなっちゃ～う。昔はみんな
で支え合って生きてたのに、今じゃどう？ みんな「スマホ」とか、「パソコン」とか
いう機械にかじりつきっぱなし。ヤンなっちゃうわ～。ああ～、ヤンなっちゃうわ～。ヤ
ダヤダッ」

少しの間。

優子「あーらっ。まだ夕ご飯の準備もできてないの？ なつさん、しっかりしてよ～」

優子、額縁に入っている写真の方へ目を向ける。

優子「ねえタカちゃん。なんでなつさんが好きになっちゃったの？ なつさんのどこが
いいのよ。料理はほっばかすし、洗濯もしないし。部屋の掃除もしなければ、草むしりも
しない。もう世も末よ！ タカちゃ～ん、お願いだから帰ってきてよ～。……ダメよ。
ダメよ、優子。タカちゃんはもうこの世にはいないの。だーめっ！ ……それにしても、
もうあれから2年も経つのね～。早いわ～。ほんとと時間が経つのが早いわ～。あ～」

なつ、部屋の近くへおそるおそる近づく。

優子はまだ物思いに耽っていて、なつの存在に気づいていない。

優子は机の上で顔を伏せてしまい、やがて眠りに落ちる。

なつ、おそるおそる舞台上に上がる。

なつ「（傍白）ハァ～、どうしよ。この人は英語もわからないし、ビジネスもまったく知
らない。私のやる仕事に理解もなければ、わかろうともしてくれない。SNSも知らな

い！ たかおさん……あなたはこんな家で生活してたの？　こんなど田舎の村で、こんなわからずやな母親のもとで、幼少時代を過ごしてたのね。ックウウウウウウウウウ～！」

優子、ふと顔を上げる。

なつ、固まる。

しばしの沈黙。

優子はよっぽど眠かったらしく、舞台の上で寝そべってしまう。

間。

なつ「（傍白）……でも、仕方ないよね。お義母さんも悪い人じゃないもん。そう、誰も悪くないっ。ただ……。……たかしさん。私、これからどうすればいいの？　あなたがこの世にいなくなって、ひとりぼっちになっちゃって……。あんな交通事故、あれさえなければ、あれさえなければ私は……。……いけない。そんなこと言ってる場合じゃない。はやく夕ご飯の準備をしなきゃ」

優子、目をさます。

優子「おはよ～」

なつ、優子の目覚めにびっくりする。

なつ「お義母さん、いつから起きてました？」

優子「いま起きたところよ」

なつ「よかった～」

優子「どういう意味よ」

なつ「いえ、なんでも。ちょっと、夕ご飯の準備をしますね」

なつ、そそくさと去ろうとする。

優子「なつさんなつさん」

なつ「はい？」

優子「あたし、いまから歌うわ」

なつ「急にどうしました？」

優子「いいじゃない！　歌をうたっちゃダメなの～？」

なつ「い、いや～」

優子「ダメなの～？」

なつ「いいですっ、いい～です！　どうぞ！」

優子「ありがとう」

優子、その場で一曲、歌唱を披露する。

なつ、拍手をする。

優子「ありがとう、ありがとう。あたし、ここまで生きてて本当に幸せだわ」

なつ「歌うまいですね」

優子「よく言われるわ」

なつ「夕ご飯、つくりに行っていていいですか？」

優子「え？」

なつ「夕ご飯、つくりに行っていていいですか？」

優子「あたしのこと嫌いなの？」

なつ「そんなことはありませんよ」

優子「じゃあ、もう一曲聞いてちょうだい」

なつ「それは無理です」

優子「ひどい！」

なつ「いや、だって。ちょっとはこっちの身にもなってみて下さい。私はただでさえ、家事をしながら買い物にも出かけて、その間で家計を切り盛りをして、パート勤務や副業もしてるんですよ？」

優子、その場で寝そべる。

なつ「お義母さん、お願いですからわかって下さい。私も人間なんです」

優子「私も人間なんです！」

なつ「人の話を聞いて下さい」

優子「人の話を聞いて下さい」

なつ「鸚鵡返しするな！」

優子、夏に襲い掛かろうとする。

なつ、ぺこぺこ誤り出す。

間。

優子「……いや、まあ、確かにそうね。あたしは、長年主人のもとで専業主婦を続けてきたわ。でも、いまあの人はどこにもいない。あの人がまさかガンで亡くなるなんて、なつさん想像できた？」

なつ「いや、その、お義母さん……」

優子「できなかったわよね？　でも唯一の救いは、タカちゃんが結婚してから、あの人が天国へ行ったことよ。正直あたしの場合、あの人がいないとやっていけなかったわ。あなたのように社会で出向いて行って、お稼ぎをすることなんてなかなかできないわよ。

家庭の用事と仕事を両立させることなんて、あたしにはできない。なつさんはそういう
点で、天才よ」

なつ「あの、そろそろ……」

優子「無視？　あたしの話を無視？」

なつ「いえ、そういうつもりはないんです」

優子「あら、そう」

なつ「夕ご飯つくりますね」

優子「あ、ああ～」

なつ「何かありました？」

優子「……い、いや、……あのね」

なつ「はい」

優子「……………教えてよ」

なつ「はい？」

優子「あたしにもなつさんがやってる仕事、教えてよ」

なつ「急にどうしたんですか」

優子「いや、だって気になるじゃな～い。パソコンだけでできる仕事があるなんて。そ
それに。……それに、大事な家族がどういう仕事をしてるのか、身内として知っておきた
いじゃない」

なつ「お義母さん」

優子「どんな仕事なの？」

なつ「……事業設計のコンサルです」

優子「どこの猿だって？」

なつ、その場を歩き去っていく。

優子「いや、待ってよ。待ってよなつさん！　なつさん！　なつさ～ん！！」

優子、なつを追いかける形で舞台を去っていく。

終わり

田舎の姑と街の嫁

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
